

## 義門師語學研究の目的

大島仲太郎

妙玄寺義門師が我が國語學に於て泰山北斗たることは夙に諸先輩の定論の有る所であつて、我々淺學の今更喋々するを要せざる所である。特に其の研究方法の精細緻密なること、其の研究態度の公平無私なること、誠に敬服に堪へざる所である。昨秋大演習の砌贈位の御沙汰の有つたことは洵に聖恩枯骨に及びたるものであつて、義門師の英靈も地下に喜び給ふのみならず、我々常に師の高徳を景仰し其の學風に私淑するものに於ても眞に歡喜の至りである。此の度佛敎研究に於て其の贈位の記念として特別に一欄を設けらるゝに當り、聊か卑見を述べて初學の人の參考に資したいと思ふのである。

私は未熟な頭で斯う考へた。日本には一として

日本人の創造した學問といふものはないやうである。宗敎哲學は勿論、醫學兵法に至る迄すべて漢土月氏歐米諸國の模倣か又は傳來であつて、獨創に出でたるものは殆どある無く、從て日本人の學問研究の能力を知るに足るものが無いやうであるが、獨り唯我が國の文法語學は古來我が國人の研究調査したるものなれば是れこそ我が國人獨創の研究であつて、これに依て我が國の學者の能力を量るべく又我が國唯一の學問として誇るに足るべきもので無いかと思ふた。此の考を以て明治年代に於ける重要な文法書を聊か調査したるに大抵は孰れも西洋文典の模型に當て嵌めたるに過ぎないと思へた。猶溯つて徳川時代の人々の研究を調べて見たのに中々獨創的研究の少からざることを感じた。特に富士谷成章、本居父子及妙玄寺義門師の如きは秩序整然たる系統的研究であつて、就中義門師に至つて前賢の研究調査を従き篩ひて集

大成せられたもので、我が國人の獨創的科學として誇るに足るべきものでは無いかと思ふた。而して是等獨創的研究と見らるゝ根本研究に就き其の學風を分けて見るに、漢學系に屬するものと、佛敎系に屬するものと、其の他に屬するものとあることを見た。富士谷一派の語法研究は漢學の研究より思ひ付いたものゝ様に思はれた。契沖及義門師の如きは全く佛敎の研究法に基きたるものであつて、其の精細緻密にして秩序系統ある大研究を成し遂げたる根本は、主として因明の理論に關する素養あるに因るであらうと思ふた。果して然りとすれば我が國語法の大成も亦佛敎の研究法に負ふ所多きものと見ねばならぬやうである。

右は義門師の語學研究法の基礎に關する考であるが、義門師の語學研究の目的は如何と見るに、契沖と同じく佛典研究の爲である。この點は義門師に關する著書論文等にも餘り書いて無いやうで

あるが、此れは餘程注意すべきことであらうと思ふ一寸淺はかに考へると、桑門の餘技として玩ぶ和歌の研究の爲に、てにをばの遣方文法を學んで深入りした位に思はるゝけれどもそれは大なる謬である。

眞宗聖敎和語說によれば最も明かに義門師の語學研究の目的を知ることが出来る。而して同書に宗學研究の補助學として語學修得の必要を述べて凡そ三義ありとしてある。

第一 妙に語意を辨せんが爲の故に。

第二 他謗を防止せんが爲の故に。

第三 或は法義に關はる爲の故に。

の三條を擧げてある。其の内第二の條に

今ハ昔彼名高キ華嚴の鳳潭諸宗門ノ祖師方ヲ毀謗イタシスナハチ我祖聖人ヲモ謗ル一ツノ道具ニ彼御和讚ニ「マモラントコンチカヒシカ」ト有ルヲ、「守ラントコンチカヒケレ」トイフベキヲ

是レシキノコトヲ知ラヌノヂヤナド、謗ラレタ  
 コトガアリテ、是ハ土臺論ニ懸ラヌ謗リナレド  
 モ「守ラントコソ誓ヒシカ」トアルノガ實ニ正イ  
 ノ也ト云フコトヲ辨ヘ居ラズシテハ、其ノ謗リ  
 ヲ止ルコトハナラヌ也、已ニ西御本山ノ學匠ノ  
 桃溪ト云フハ總ジテ前々ノ學者ノ中デモ勝レタ  
 人ナルガ、夫ガ右ノ鳳潭ノ謗リヲ防ントテアノ  
 「シカ」ト云フノハ「我庵ハ都ノタツミシカゾス  
 ム」ノ「シカ」ト同ジコトヂヤトイハレタ、是更  
 ニ以テ鳳潭ノ謗ヲ防グニ足ラズ、和學者ノ爲ニ  
 ハ鳳潭ニ笠キセタ妄説ヂヤト益々笑フコソ引ク  
 ベキ説也、固ヨリ御和讃ノ御詞遣ノ御正意ニハ  
 相カナハザルコト遙ニヘダ、リタルコト也云々  
 とある。右様の語法は今日にては中學校の生徒で  
 も分別せることなるに、昔は一宗門の名僧知識に  
 して斯る妄説を爲せるは、誠に不思議の至りであ  
 る。古來各宗に於て、宗乘性相の研究は深遠のも

のとして、骨を折つて研究せらるゝけれども、語  
 法訓點の研究は粗略にせらるゝ傾があるやうであ  
 るが、語法訓點の學問は義門師の云はるゝ通り佛  
 乘研究上必要缺くべからざるものであれば、今回  
 著手せらるゝ佛典邦譯の大事業に就ても、十分此  
 の方面につきて御注意あらんことを切望するの  
 ある。

近頃佛典の邦譯と稱して古來の訓點を其儘延べ  
 書きにしたものがあるけれども、それにては往々  
 意義解し難きものが多いやうである例へば法華經  
 の自我偈の

我淨土不毀 而衆見燒盡 憂怖諸苦惱

如足悉充滿

を延べて

而も衆は燒け盡きて憂怖諸の苦惱是の如き悉  
 く充滿せりと見る。(島地大等編四二七)

とあるけれども、此れでは「衆は燒盡きて」と連續

して讀まれて「衆人が皆焼け死んで云々」の意味に取られて漢文の意義通じ難いやうに思はれる。然るに延寶四年板の法華經科註には

我が淨土は毀れざるに而も衆は燒盡すと見る。憂怖諸の苦惱是の如き悉く充滿せり。

とある此の方は語理相通じ耳に入りて意義覺り易きやうに考へられる。我々俗人の眼よりすると斯る無理なる點がわからぬのである。何れの宗門を問はず義門師の趣旨を體認せられて、語法訓點等に就ても十分に留意研究せられたいものである。

終に一言すべきは義門師の著書數々ある中に

#### 友鏡底廻影

は彼の詳細なる赤堀氏の語學書解題にも未見として臆測の説明を下してあるが、先年堺市の老醫大槻季夫氏より小田清雄の手澤本といはるゝ友鏡底廻影を貸與せられたから、畏夫正宗敦夫君に示したるに、此の書は小濱の東條氏の方にも已に原本

燒失せる由なればとて之を謄寫せられて他日義門全集印行の材料にしたいと申越された。

(大正九、三、十四夜)

#### 語辭林香記を繙きつゝ

橋川 正

東條義門師一代の行蹟は、大島那賀氏の義門師略年譜(明治三十七年十月發行)『心の花』七ノ八)を見れば一目の中に見らるゝのみならず、松見半十郎氏の『義門法師』(若州偉人傳第一編)は唯一公刊の傳記として、坐右の好參考に供することが出来るのである。而して氏の義門傳史料は、現に小濱妙立寺に藏する嗣子逢傳稿の先考義門略傳妙立寺歴世圖譜、同系譜及び菊池三谿筆の義門傳などから多く得られたものらしく思はれるのであるが、これらの史料は何れも義門傳を研究するに當つて